

ロードバイクブームを背景とした参加型スポーツツーリズムの考察 —「ツール・ド・ちば」を事例として—

A study of the participatory type sport tourism in the road bike boom: In a case of “Tour de Chiba”

1K09B158 野津 亮介

指導教員 主査 作野 誠一 先生 副査 木村 和彦 先生

【緒言】

近年、健康やエコへの関心が非常に高くなってきている。それと同時に、自転車のメリットが注目されるようになり、ブームが巻き起こっている。そのような背景のもと、各地でサイクリイベントが開催されるようになり、地域活性化に貢献している。筆者の地元、千葉県で開催されている「ツール・ド・ちば」もそのようなイベントの一つである。

「ツール・ド・ちば」は、2006年の開催当初からわずか3年で参加者総数2,100人を超える一大イベントに成長した。同イベントは、千葉県房総半島を中心に行われる自転車で長距離を走行するイベントである。また、その趣旨は、「全国のサイクリング愛好者を千葉県に迎え、房総半島を自らの体力と気力で走ることを目的とし、スピード競技ではなく、交通法規と大会規定を守り、完走した人を称する大会」（ツール・ド・ちば2012HPより抜粋）である。

前述の通り、日本各地でサイクリイベントが開催されているが、その多くがストックなスピード競技である。それに対して、「ツール・ド・ちば」は、①平均速度別のグループ走行（指導員付き）、②完走目的、③参加制限は年齢のみ、などの「初級者目線」の特徴を有している。このように、参加者に対する敷居が非常に低くなっていることが、同イベントの急成長の一助になっていると考えられる。また、コース内に設置された「エイドステーション」と呼ばれる休憩ポイントでは、地域の「おもてなし」を全面に押し出したPR戦略も参加者増加・リピーター確保につながっているのではないだろうか。以上より、スポーツツーリズムによる地域活性化の観点から見てもサイクリイベントは有益性の高さが伺える。

本研究の目的は、「レベル別のグループで完走を目指す」という異色のサイクリイベント「ツール・ド・ちば」が、観光立県を目指す千葉県にどのように貢献できるかを考察するものである。

【研究方法】

研究方法は、参加者へのアンケート調査及び、主催者へのインタビュー調査である。アンケート調査は、「ツール・ド・ちば2012」参加者の参加要因を明らかにする設問内容が中心である。また、インタビュー調査は、①「ツール・ド・ちば」開催経緯と現状について、②大会運営上の問題について、③今後の「ツール・ド・ちば」とサイクリイベントについて、などが主な内容である。

【結果及び考察】

アンケート調査の結果から、「ツール・ド・ちば」急成長の要因は、「完走を目的としたグループ走行」というファンライド目線のレベル設定が人気を集めたからである、という仮説を証明することができた。

このことから、地域活性化を目的として、多くのヒトを誘致するためのイベントを開催する際は、なるべく「初級者目線」のプログラム設定を念頭に置くべきである。そして、参加者が集まり、ある程度知名度が出てきたとき、その後の運営方針を「現状維持」にするのか「さらなる参加者の誘致」にするのかを議論する必要がある。「ツール・ド・ちば」は、開催当初から参加者総数を伸ばし、第7回開催を終えて安定的に2,000人規模の運営ができるようになってきた。同イベントは、まさに今、今後のあり方を考える時期を迎えているのではないかと思われる。

主催者へのインタビュー調査の結果、特に印象に残ったのは、「参加者増加よりも安全第一」という姿勢である。サイクリイベントにおける最悪の事態は、「事故」である。このことは、その他のスポーツイベントと違って、道路規制されていない公道を長距離走行する本イベントで特筆すべき点である。事故が発生してしまうと、参加者だけでなく地域からも信用を損なってしまう。参加者は、多ければ良いというわけではないのである。

これらのことから、本研究で挙げた「プログラムの拡充・改変」という一つの改善策は、費用対効果の面からみると「ツール・ド・ちば」に適用するのは現実的には難しいといえる。よって、安全を維持しつつも、参加者の満足度を向上させるための代替案について議論するべきである。

【課題と提案】

今年、第7回開催を終えた「ツール・ド・ちば」の課題として、「初級者目線の限界」が挙げられる。そのため、これからの施策を、現状維持にするのかプログラムの多様化・拡充を試みるのか、ということも議論する必要がある。しかし、主催者へのインタビュー調査から、資金面の問題や、警察からの反応を考えると、厳しい現状であることが明らかになった。限られた費用で「安全第一」の現状を維持する姿勢を貫くのであれば、コース設定を毎年変更するなど、イベントのマナー化を防ぐ配慮が重要となるとと思われる。